

植	物	
防	疫	
講	座	

害虫飼育法 アメリカシロヒトリ

一般社団法人 日本植物防疫協会

つえだ ひろつぐ しまさき ゆうき
杖田 浩二・島崎 祐樹・
なまため なおき はっちょう あきたつ
生田目 直樹・八丁 昭龍

はじめに

アメリカシロヒトリ *Hyphantria cunea* (Drury) は、幼虫が多様な果樹や樹木の葉を食害する広食性害虫である。本種は北米原産の侵入害虫であり、我が国には戦後に侵入したと考えられている(中田, 1959; Gomi, 2007)。侵入後、急速に分布を拡大し、現在は九州北部、四国および本州に分布するとされている(国立環境研究所データベース)。北海道でも2000年と2001年に函館市で発生が確認されており(館, 2000; 2002)、2010年以降は継続的に発生している(三上ら, 2018)。

本種成虫は5~9月にかけて年2~3回発生する。埼玉県や茨城県の桑園では、5月上中旬、7月中下旬および8月下旬~9月上旬に成虫の発生ピークが認められると報告されている(新井・秋山, 1976; 池上・伏木, 1996)。本種成虫は、数百~1,000個の卵からなる卵塊を産下する。若齢幼虫は糸を吐いて巣網を作り、その内部で葉を

集団で食害する。幼虫の齢期が進むと分散し、摂食量も多くなる。そのため、枝だけでなく樹全体の葉がなくなることもある。多くの果樹や庭木において本種は重要害虫であり、殺虫剤による防除が不可欠である。

新農薬実用化試験において、多くの果樹や樹木のケムシ類の試験で本種はよく用いられる。しかし、自然発生条件下では圃場内での分布が不均一になるため、放虫試験が主となる。放虫試験を成功させるには、十分な虫数を確保するため飼育が不可欠である。そこで、本稿では本種の飼育法と、試験時のポイントについて解説する。

I. 材料の採集

本種は幼虫を採集し、飼育を開始するのが一般的である。幼虫は葉や枝を吐糸でつづった巣網内で、葉を集団で食害する(図-1)。集団で生活するのは3齢幼虫までとされていること(田村, 1965)、その被害箇所は特徴的でよく目立つことから、採集には集団でいる若齢幼虫



図-1 サクラの被害箇所(巣網;左)と巣網内の幼虫(右)

Rearing Methods of Fall Webworm, *Hyphantria cunea*. By Hirotsugu TSUEDA, Yuki SHIMASAKI, Naoki NAMATAME and Akitatsu HATCHO

(キーワード: 害虫, 飼育法, アメリカシロヒトリ)